

電子メールに対する利点・欠点認識からみた

中国における情報モラル教育の検討

—中国（吉林省）の高校生を対象とした調査から—

An Examination of Information Ethics Education Focusing on

Learners' Awareness of Merits and Demerits of E-mail Usage:

Based on a Survey Conducted on Senior High School Students in Kitsurin, China

畑野裕子*・森山潤**・金楠***

要旨

本研究では、国際的な視野より情報モラル教育における学習者のレディネス把握を試みるため、先報(畑野ら, 2018)に引き続き、電子メールに対する利点・欠点認識について、中国(吉林省)の高校3年生を対象とした調査から検討を試みた。その結果、中国(吉林省)の高校3年生は、日本の高校3年生に比べて、電子メールの気軽さ、人間関係の広げやすさなどの観点で利点認識を強く意識していた。しかし、電子メールによる悪質な被害やトラブルが起りうること、相手の表情や話し方などノンバーバルコミュニケーションがとりにくいことなどの欠点認識が弱い傾向が示唆された。

キーワード：情報モラル教育 高校生 電子メール 利点・欠点認識 中日比較

1. 緒言

本研究の目的は、国際的な視野により情報モラル教育における学習者のレディネスを把握する観点から、中国(吉林省)の高校生の電子メールに対する利点・欠点認識の実態を把握することである。

情報化の進展とともに、日々の生活の中に多様な情報手段が浸透する中、情報モラルに関する事件・事案が問題となって久しい。これには、携帯情報端末の普及によって、パーソナルメディアがコミュニケーションの主要な手段となってきたことが一因となっている。例えば、稲垣ら(2004)は、小学4年生112名を対象に、ケータイ利用の実態とその情報モラルやマナー

* 神戸親和女子大学 発達教育学部 児童教育学科 教授

** 神戸親和女子大学大学院 教育学専攻 非常勤講師(兵庫教育大学大学院教授)

*** 西安交通大学 事務局

に関する知識を調査している。その結果、当時の利用の実態としては、約96%の子どもがケータイの使用経験を有し、そのうちの約30%が個人用のケータイを保有していることが分かった。また、ケータイに関する基礎知識では、通信・通話時以外の電波についての誤った理解が6割以上に及んでいた。ケータイの使用に関する情報モラルやマナー関連の話題を聞いた経験では、カメラ付きケータイでの撮影に関する話題に接する機会が相対的に少ないことなどを報告している。このことから、児童・生徒にケータイ使用が普及し始めた2004年頃には、ケータイ使用の情報モラルやマナーに関する指導の問題点が指摘されていると思われる。また、森広ら(2004)は、2004年当時、電子メールが中学校でよく利用されるコミュニケーションメディアの1つであるとし、その利用に際しての生徒の情報モラルに関わる問題を指摘している。日常的な電子メールの利用経験をポर्टフォリオ的に蓄積・整理していくことで、継続的に情報モラルに関する考え方と自己の行動の一体化を目指す学習支援システムの開発を検討している。そして、実施した授業実践の内容と、その結果の分析について述べている。

このような動向は、中国も同様である。付・林(2006)は、中学生を対象に、ICTを利用した教育の現状を把握しようとアンケート調査を実施している。具体的には、中国(黒龍江省)佳木斯市第十九中学校を事例とし、ICTを利用した教育の現状にみられる課題について検討している。そして、ICTを利用した教育に対する生徒の関心、意欲などと実際の学習不足の矛盾、コンピュータ、携帯電話などの情報メディアの広範的な利用と情報社会に参画する態度の学習欠如などを指摘している。このように電子メールのようなパーソナルメディアの使用に関する情報モラル教育の重要性は、日本国内のみならず、国際的な観点からみて重要な課題となってきた。

そのような状況を背景として、日本と中国の情報教育におけるカリキュラムや学習者の実態の差異についての先行研究が行われてきている。例えば、高校生の情報活用に関する日中比較研究をみると、方ら(2005)は、中国と日本の「情報」に関する教科を学習している地方都市の大学進学率の高い高校生において調査している。その結果、情報活用の実践力に関しては両国に大きな差はみられなかったと報告している。また、情報モラルに関する意識については文化的要因から差がみられたが、両国とも基本的な情報モラルに関する意識が高いとは言い難い結果を示している。この報告は、10年以上前の結果に基づいているため、現在とは様々な状況が変化しているものの、当時から情報モラル教育について、より一層の充実が望まれていたことが示唆される。

2008年の学習指導要領改定後の研究をみると、徐ら(2013)は、小学校における情報に関する教育を中日の教育課程を比較するとともに、両国における情報に関する教育の目標や学習内容についても比較している。教育内容についての類似点は多かったが、情報に関する教育のための具体的な授業時数を日本は規定していないのにもかかわらず、中国ではその授業時数が示されていた。さらに、両国の小学校における情報に関する教育用として出版されている教科

書を事例として取り上げ、単元群毎の学習内容を列挙し、その構成を分析し、学習項目の割合を比較している。その結果、単元群毎の割合に大きな差異があり、特に中国の教科書では、「情報社会に参画する態度」に対応する学習内容が日本と比較して著しく低いことが明らかにされた。

筆者らは、このような観点から、前報（畑野ら，2018）において電子メール使用に対する意識の日中比較を試みた。具体的には、中国（吉林省）の高校3年生における日常生活での電子メールの利用状況の実態を把握した。その際、森山ら（2012a）が収集した日本（兵庫県）の高校生データの中で、3年生のデータのみを抽出し、その調査結果と比較・検討した。その結果、中国（吉林省）の高校3年生は、日本（兵庫県）の高校3年生よりも、電子メールの重要性を強く認識しているものの、電子メールによるコミュニケーションの質の低下をあまり意識していない傾向が示唆された。一方、中国（吉林省）の高校3年生は、日本（兵庫県）の高校3年生に比べて、電子メール使用に関わるトラブル経験が多い実態が把握された。

このように、国際的な視野により情報モラル教育の在り方を検討することは、各国の教育の方向性を考察する上で有用な資料となりうる。しかし、前報（畑野ら，2018）では、中国の高校生の持つトラブル経験の多さについて、その詳細な実態は把握できていなかった。そこで本報では、トラブル経験の実態を詳細に検討するために、中国（吉林省）の高校生を対象とした調査から、電子メールに対する利点・欠点認識の実態を把握することにした。

2. 研究方法

2.1 調査対象

調査対象は、前報（畑野ら，2018）と同じ中国（吉林省）長春市内の公立高等学校3校の3年生計250名とした。有効回答者数は、計219名（男子計107名、女子計112名、有効回答率87.6%）である。本調査対象の学習経験は、中学校で「インターネット利用基礎」、高等学校で「情報技術基礎」をそれぞれ既習である。調査対象者及び有効回答については、表1に示す。また、前報と同様に、森山ら（2012a）の収集した兵庫県内公立高校生728名の中でも、高校3年生（136名；男子計56名、女子計78名、有効回答率98.5%）のデータを取り上げ、日本の高校3年生のデータとして、調査結果を比較し、中日両国の高校3年生の実態に関して検討することにした。

表1 調査対象者及び有効回答（中国吉林省の高校3年生）

	調査対象			有効回答			有効回答率
	男子	女子	計	男子	女子	計	
A高校	30	43	73	30	36	66	90.4%
B高校	40	54	94	38	42	80	85.1%
C高校	40	43	83	39	34	73	88.0%
全体	110	140	250	107	112	219	87.6%

2.2 調査項目

調査項目は、森山ら（2012a）の調査項目に基づいて、電子メールに対する利点認識、欠点認識の2設問を設定した。具体的な調査票の質問項目については、次に示すとおりである。

（1）電子メールに対する利点認識を把握する項目

電子メールに対する利点認識では、「電子メールの良いところについてあなたは次の項目に対してどの程度思いますか」という質問に対して、次の計9項目に対するあてはまる程度の回答を求めた。回答は、「4 と思う」、「3 少し思う」、「2 あまりそう思わない」、「1 まったく思わない」の4件法とした。

- ① メールは、友人や仲間と人間関係を深めたり維持したりするのに役立つこと
- ② メールは、新しい人間関係を広げていくのに役立つこと
- ③ メールは、一度にたくさんの人と素早く情報を共有するのに役立つこと
- ④ 身近な友人だけでなく、遠くにいる人ともコミュニケーションが取れること
- ⑤ 仲の良い友人だけでなく、普段あまり話さない人ともコミュニケーションが取れること
- ⑥ メールの内容が残っているため、後で自由に読み返せること
- ⑦ 電話と違って自分の空いている時間に使用することができること
- ⑧ 直接言いにくいことでも、メールを使うと使いやすいこと
- ⑨ メールは些細なことや、あまり重要でないことでも気軽に聞きやすいこと

（2）電子メールに対する欠点認識を把握する項目

電子メールに対する欠点認識では、「電子メールの悪いところについてあなたは次の項目に対してどの程度思いますか」という質問に対して、次の計8項目に対するあてはまる程度の回答を求めた。回答は、「4 と思う」、「3 少し思う」、「2 あまりそう思わない」、「1 まったく思わない」の4件法とした。

- ① メールによる悪質な被害やトラブルがあること
- ② 返信がすぐに来ないなど、断片的なコミュニケーションになること
- ③ メールでのやりとり時間を費やすこと
- ④ 使用料金が高いこと
- ⑤ メールでのやりとりの中で、誤解やトラブルが起こること
- ⑥ 相手の表情や話し方がメールを通して分からないこと
- ⑦ メールを通して相手の気持ちを理解することが難しいこと
- ⑧ メールを通して相手に自分の気持ちを伝えることが難しいこと

2.3 調査の手続き

調査は、2011年8～9月に、各調査対象校の担当教員に依頼し、実施した。調査後、設問

ごとに尺度平均値を求め、電子メールに対する利点認識、欠点認識の実態を日本の高校3年生(男子56名、女子78名、計134名)のデータと比較した。

3. 結果と考察

3.1 電子メールに対する利点認識の状況

まず、電子メールに対する利点認識の状況について集計した。尺度全体の平均値について、中国の高校3年生と日本の高校3年生を比較した(表2)。その結果、利点認識全体では、中国の高校3年生の平均値が男女共に有意に高かった(中国:3.78、日本:3.21)。

表2 電子メールに対する利点認識尺度の平均値

利点認識		中国	日本	t検定
男子	平均	3.75	3.29	t(160)Welch=11.99 **
	S.D.	0.32	0.17	
女子	平均	3.81	3.26	t(114)Welch=10.36 **
	S.D.	0.25	0.42	
全体	平均	3.78	3.21	t(198)Welch=12.86 **
	S.D.	0.29	0.46	

** $p < .01$ 4段階法

次に、項目別に平均値を集計し、中国・日本の高校生別に、顕著な傾向を持つ項目に着目した(表3、表4、表5)。その結果、中国の高校3年生では、「メールは些細なことや、あまり重要でないことでも気軽に聞きやすいこと」(平均値:4.00)、「メールは、新しい人間関係を広げていくのに役立つこと」(平均値:3.83)などの項目において、平均値が高かった。しかし、「身近な友人だけでなく、遠くにいる人ともコミュニケーションが取れること」(平均値:3.74)の項目においては、平均値が相対的に低かった。一方、日本の高校3年生では、「身近な友人だけでなく、遠くにいる人ともコミュニケーションが取れること」(平均値:3.65)、「メールは、一度にたくさんの人と素早く情報を共有するのに役立つこと」(平均値:3.51)などの項目において、平均値が高かった。しかし、「メールは、新しい人間関係を広げていくのに役立つこと」(平均値:2.19)の項目においては、平均値が相対的に低かった。

さらに、各項目別に中国の高校3年生と日本の高校3年生の平均値を比較した。その結果、「身近な友人だけでなく、遠くにいる人ともコミュニケーションが取れること」においてのみ有意な差は認められなかったものの、その他の全ての項目においていずれも中国の高校3年生の平均値が日本の高校3年生に比べて有意に高くなった。また、男女別(表4、表5)にみても、その結果は同様であった。

これらの結果から、中国の高校3年生の方が日本の高校3年生よりも、電子メールに対する利点認識を強く意識している傾向が示唆された。

表3 電子メールに対する利点認識尺度における各項目の平均値(全体)

		中国 (N=219)	日本 (N=134)	t検定
メールは、友人や仲間と人間関係を深めたり維持したりするのに役立つこと	平均 S.D.	3.82 0.41	3.19 0.81	t(175)Welch=8.37 **
メールは、新しい人間関係を広げていくのに役立つこと	平均 S.D.	3.83 0.39	2.19 0.87	t(166)Welch=20.59 **
メールは、一度にたくさんの人と素早く情報を共有するのに役立つこと	平均 S.D.	3.78 0.48	3.51 0.67	t(216)Welch=4.07 **
身近な友人だけでなく、遠くにいる人ともコミュニケーションが取れること	平均 S.D.	3.74 0.52	3.65 0.59	t(351)=1.50 ns
仲の良い友人だけでなく、普段あまり話さない人ともコミュニケーションが取れること	平均 S.D.	3.79 0.53	2.80 0.92	t(187)Welch=11.36 **
メールの内容が残っているため、後で自由に読み返せること	平均 S.D.	3.77 0.51	3.33 0.73	t(212)Welch=6.12 **
電話と違って自分の空いている時間に使用することができること	平均 S.D.	3.81 0.47	3.36 0.75	t(197)Welch=6.24 **
直接言いにくいことでも、メールを使うと使いやすいこと	平均 S.D.	3.77 0.53	2.99 0.89	t(191)Welch=9.20 **
メールは些細なことや、あまり重要でないことでも気軽に聞きやすいこと	平均 S.D.	4.00 0.50	3.17 0.85	t(190)Welch=10.27 **

** $p < .01$ 4段階法

表4 電子メールに対する利点認識尺度における各項目の平均値(男子)

		中国 (n=107)	日本 (n=56)	t検定
メールは、友人や仲間と人間関係を深めたり維持したりするのに役立つこと	平均 S.D.	3.82 0.43	3.36 0.73	t(75)Welch=4.34 **
メールは、新しい人間関係を広げていくのに役立つこと	平均 S.D.	3.79 0.43	3.10 0.91	t(68)Welch=5.37 **
メールは、一度にたくさんの人と素早く情報を共有するのに役立つこと	平均 S.D.	3.72 0.56	3.46 0.75	t(87)Welch=2.28 *
身近な友人だけでなく、遠くにいる人ともコミュニケーションが取れること	平均 S.D.	3.73 0.54	3.61 0.65	t(161)=1.25 ns
仲の良い友人だけでなく、普段あまり話さない人ともコミュニケーションが取れること	平均 S.D.	3.77 0.56	2.99 0.95	t(75)Welch=5.65 **
メールの内容が残っているため、後で自由に読み返せること	平均 S.D.	3.70 0.55	3.23 0.76	t(85)Welch=4.10 **
電話と違って自分の空いている時間に使用することができること	平均 S.D.	3.72 0.52	3.34 0.75	t(83)Welch=3.39 **
直接言いにくいことでも、メールを使うと使いやすいこと	平均 S.D.	3.72 0.56	3.07 0.94	t(75)Welch=4.75 **
メールは些細なことや、あまり重要でないことでも気軽に聞きやすいこと	平均 S.D.	3.79 0.50	3.17 0.82	t(76)Welch=5.18 **

** $p < .01$ * $p < .05$ 4段階法

表5 電子メールに対する利点認識尺度における各項目の平均値(女子)

		中国 (n=112)	日本 (n=78)	t検定
メールは、友人や仲間と人間関係を深めたり維持したりするのに役立つこと	平均 S.D.	3.81 0.39	3.40 0.73	t(107)Welch=4.53 **
メールは、新しい人間関係を広げていくのに役立つこと	平均 S.D.	3.86 0.53	3.18 0.83	t(120)Welch=6.39 **
メールは、一度にたくさんの人と素早く情報を共有するのに役立つこと	平均 S.D.	3.83 0.55	3.47 0.71	t(138)Welch=3.76 **
身近な友人だけでなく、遠くにいる人ともコミュニケーションが取れること	平均 S.D.	3.75 0.51	3.72 0.55	t(188)=0.39 ns
仲の良い友人だけでなく、普段あまり話さない人ともコミュニケーションが取れること	平均 S.D.	3.82 0.50	3.18 0.90	t(110)Welch=5.70 **
メールの内容が残っているため、後で自由に読み返せること	平均 S.D.	3.85 0.44	3.44 0.74	t(114)Welch=4.38 **
電話と違って自分の空いている時間に使用することができること	平均 S.D.	3.85 0.42	3.58 0.64	t(122)Welch=3.27 **
直接言いにくいことでも、メールを使うと言いやすいこと	平均 S.D.	3.81 0.49	3.19 0.89	t(109)Welch=5.59 **
メールは些細なことや、あまり重要でないことでも気軽に聞きやすいこと	平均 S.D.	3.78 0.49	3.24 0.83	t(114)Welch=5.15 **

** $p < .01$ 4段階法

3.2 電子メールに対する欠点認識の状況

まず、電子メールに対する欠点認識の状況について集計した。尺度全体の平均値について、中国の高校3年生と日本の高校3年生を比較した(表6)。その結果、欠点認識全体では、中国の高校3年生の平均値が男女共に有意に低かった(中国：2.85、日本：3.14)。

表6 電子メールに対する欠点認識尺度の平均値

欠点認識		中国	日本	t検定
男子	平均	2.86	3.04	t(161)=2.58 **
	S.D.	0.39	0.48	
女子	平均	2.83	3.21	t(188)=5.91 **
	S.D.	0.44	0.43	
全体	平均	2.85	3.14	t(351)=6.15 **
	S.D.	0.41	0.46	

** $p < .01$ 4段階法

次に、項目別に平均値を集計し、中国・日本の高校3年生別に、顕著な傾向を持つ項目に着目した(表7、表8、表9)。その結果、中国の高校3年生では、「メールのやりとりの中で、誤解やトラブルが起ること」(平均値：3.02)、「相手の表情や話し方がメールを通して分からないこと」(平均値：3.02)などの項目において、平均値が高かった。しかし、「返信がすぐに来ないなど、断片的なコミュニケーションになること」(平均値：2.71)の項目においては、

平均値が低かった。一方、日本の高校3年生では、「メールによる悪質な被害やトラブルがあること」(平均値:3.54)、「相手の表情や話し方がメールを通して分からないこと」(平均値:3.23)などの項目において、平均値が高かった。しかし、「返信がすぐに来ないなど、断片的なコミュニケーションになること」(平均値:2.63)の項目においては、平均値が低かった。

さらに、各項目別に中国の高校3年生と日本の高校3年生の平均値を比較した。その結果、全体では「メールによる悪質な被害やトラブルがあること」(中国:2.92、日本:3.54)、「相手の表情や話し方がメールを通して分からないこと」(中国:3.02、日本:3.23)、「メールを通して相手の気持ちを理解することが難しいこと」(中国:2.86、日本:3.06)、「メールを通して相手に自分の気持ちを伝えることが難しいこと」(中国:2.85、日本:3.03)において、中国の高校3年生の方が日本の高校3年生よりも平均値が有意に低かった。

しかし、この傾向には性別による差異が認められた。男子では、「メールによる悪質な被害やトラブルがあること」(中国:2.99、日本:3.38)において、中国の高校3年生の方が日本の高校3年生よりも平均値が有意に低かった。これに対して女子では、「メールによる悪質な被害やトラブルがあること」(中国:2.86、日本:3.66)、「メールのやりとりの中で、誤解やトラブルが起こること」(中国:2.97、日本:3.28)、「相手の表情や話し方がメールを通して分からないこと」(中国:2.84、日本:3.38)、「メールを通して相手の気持ちを理解することが難しいこと」(中国:2.87、日本:3.21)、「メールを通して相手に自分の気持ちを伝えることが難しいこと」(中国:2.83、日本:3.19)において、中国の高校3年生の方が日本の高校3年生よりも平均値が有意に低かった。これらの結果から、中国の高校3年生の方が日本の高校3年生よりも、電子メールに対する欠点認識が弱い傾向が示唆された。

表7 電子メールに対する欠点認識尺度における各項目の平均値(全体)

		中国 (N=219)	日本 (N=134)	t検定
メールによる悪質な被害やトラブルがあること	平均 S.D.	2.92 0.58	3.54 0.74	t(231)Welch=8.27**
返信がすぐに来ないなど、断片的なコミュニケーションになること	平均 S.D.	2.71 0.68	2.63 0.98	t(211)Welch=0.83 ns
メールでのやりとり時間を費やすこと	平均 S.D.	2.80 0.75	2.81 0.95	t(233)Welch=0.10 ns
使用料金が高いこと	平均 S.D.	2.75 0.77	2.84 0.99	t(230)Welch=0.90 ns
メールのやりとりの中で、誤解やトラブルが起こること	平均 S.D.	3.02 0.79	3.15 0.89	t(351)=1.43 ns
相手の表情や話し方がメールを通して分からないこと	平均 S.D.	3.02 0.75	3.23 0.85	t(351)=2.43 *
メールを通して相手の気持ちを理解することが難しいこと	平均 S.D.	2.86 0.79	3.06 0.87	t(351)=2.22 *
メールを通して相手に自分の気持ちを伝えることが難しいこと	平均 S.D.	2.85 0.79	3.03 0.89	t(351)=1.98 *

** p<.01 * p<.05 4段階法

表8 電子メールに対する欠点認識尺度における各項目の平均値(男子)

		中国 (n=107)	日本 (n=56)	t検定
メールによる悪質な被害やトラブルがあること	平均 S.D.	2.99 0.54	3.38 0.88	t(77)Welch=3.03 **
返信がすぐに来ないなど、断片的なコミュニケーションになること	平均 S.D.	2.73 0.64	2.62 0.97	t(80)Welch=0.77 ns
メールでのやりとり時間を費やすこと	平均 S.D.	2.72 0.76	2.75 0.95	t(161)=0.22 ns
使用料金が高いこと	平均 S.D.	2.74 0.77	2.77 1.01	t(89)Welch=0.19 ns
メールのやりとりの中で、誤解やトラブルが起ること	平均 S.D.	3.07 0.62	2.97 0.94	t(80)Welch=0.72 ns
相手の表情や話し方がメールを通して分からないこと	平均 S.D.	2.95 0.73	3.04 0.91	t(161)=0.69 ns
メールを通して相手の気持ちを理解することが難しいこと	平均 S.D.	2.85 0.75	2.86 0.91	t(161)=0.08 ns
メールを通して相手に自分の気持ちを伝えることが難しいこと	平均 S.D.	2.86 0.80	2.83 0.92	t(161)=0.22 ns

** $p < .01$ 4段階法

表9 電子メールに対する欠点認識尺度における各項目の平均値(女子)

		中国 (n=112)	日本 (n=78)	t検定
メールによる悪質な被害やトラブルがあること	平均 S.D.	2.86 0.61	3.66 0.59	t(188)=9.01 **
返信がすぐに来ないなど、断片的なコミュニケーションになること	平均 S.D.	2.70 0.72	2.64 0.99	t(131)Welch=0.46 ns
メールでのやりとり時間を費やすこと	平均 S.D.	2.86 0.75	2.85 0.96	t(138)Welch=0.08 ns
使用料金が高いこと	平均 S.D.	2.75 0.79	2.89 0.99	t(141)Welch=1.04 ns
メールのやりとりの中で、誤解やトラブルが起ること	平均 S.D.	2.97 0.66	3.28 0.83	t(140)Welch=2.75 *
相手の表情や話し方がメールを通して分からないこと	平均 S.D.	2.84 0.76	3.38 0.78	t(188)=4.77 **
メールを通して相手の気持ちを理解することが難しいこと	平均 S.D.	2.87 0.79	3.21 0.81	t(188)=2.89 **
メールを通して相手に自分の気持ちを伝えることが難しいこと	平均 S.D.	2.83 0.78	3.19 0.83	t(188)=3.05 **

** $p < .01$ 4段階法

4. まとめと今後の課題

本報では、中日両国の高校3年生を対象に、電子メールに対する高校生の利点・欠点認識の実態を把握した。その結果、利点認識全体では、中国の高校3年生の平均値が男女共に有意に高く、項目別に比較しても、1項目を除いていずれも中国の高校3年生の平均値が有意に高かった。これらの結果から、中国の高校3年生の方が日本の高校3年生よりも、電子メールに対する利点認識を強く意識している傾向が示唆された。

一方、欠点認識全体では、中国の高校3年生の平均値が男女共に有意に低く、項目別にみても、4つの項目においては、中国の高校3年生の方が有意に低かった。しかし、この傾向には性別による差異が認められ、男子では、1つの項目「メールによる悪質な被害やトラブルがあること」において、中国の高校3年生の方が有意に低かった。これに対して女子では、「メールによる悪質な被害やトラブルがあること」など5つの項目において、中国の高校3年生の方が有意に低かった。これらの結果から、中国の高校3年生の方が日本の高校3年生よりも、電子メールに対する欠点認識が弱い傾向が示唆された。

以上の結果と前報（畑野ら，2018）の結果をまとめると、中国（吉林省）の高校3年生は、日本（兵庫県）の高校3年生に比べて、電子メールの重要性を強く認識しているものの、電子メールによるコミュニケーションの質の低下をあまり意識していない傾向であった。一方、中国の高校3年生は、日本の高校3年生に比べて、電子メール使用に関わるトラブル経験が多く、電子メールに対する利点認識を強く意識している反面、欠点認識が弱い傾向が示唆された。

本報においては、電子メールに対する利点欠点認識に関して調査するという点では、森山ら（2012a）の研究と類似しているものの、その対象者が中国（吉林省）の高校3年生であった。そして、男女別に中国と日本の高校3年生を比較し、調査対象者に限界があるものの、中国と日本の高校生の電子メールに対する利点・欠点認識に関する実態に関しては、中国の高校3年生の方が、電子メールに対する欠点認識が弱い傾向という一定の知見が得られた。このような欠点認識の弱さが、トラブル経験の多さに繋がっている可能性が考えられる。

森山ら（2012a）は、携帯電話を用いたコミュニケーションに焦点を当て、日本の高校生の電子メールに対する利点・欠点認識がマナー意識の形成に及ぼす影響について検討している。その結果、使用頻度の多い生徒、トラブル経験の多い生徒、重要性認識の強い生徒ほど、それぞれ利点認識が強くなる傾向を認めている。しかし、欠点認識とマナー意識には同様の関連性はいずれも認められず、電子メールでトラブルを経験しながらもその重要性を認識し、より頻繁に利用するヘビーユーザほど、電子メールの利点を強く認識していることを報告している。特に、使用頻度の少ない生徒では利点認識の影響力が消失する一方で、使用頻度とトラブル経験が共に多いヘビーユーザの生徒においては、逆に利点認識の影響力が強まる傾向をそれぞれ示している。

このように、パーソナルメディアに対して抱く利点・欠点認識は、少なからず日本の高校生

では、トラブルを回避するためのマナー意識の形成と関連性が認められる。しかし、本研究では、中国の高校生においても、利点・欠点認識がトラブルを回避するマナー意識の形成に寄与しているか否かについてまでは検討できておらず、今後の課題としたい。また、本研究で得られた生徒の実態の背後にある要因について、詳細な検討を行っていく必要がある。さらに、森山ら（2012b）が検討している高校生の電子メールに対する意識と共感経験との関連性などについても、今後検討が必要であると考えられる。

5. 文献

- 付婷婷・林徳治（2006）中国におけるICTを利用した教育の現状と課題．日本教育情報学会第22回年会論文集，272-273.
- 畑野裕子・森山潤・金（2018）情報モラル教育における学習者のレディネスに関する日中比較—中国の高校生の電子メール使用に対する意識を中心に—．神戸親和女子大学大学院，14：55-62.
- 方華・佐藤健太・中田寿夫（2005）高校生の情報活用に関する日中比較．教育実践研究，13：41-46.
- 稲垣成哲・竹中真希子・出口明子・大久保正彦（2004）ケータイの利用と情報モラルに関する現状調査：小学生を対象として．科教研報，19-1：63-68.
- 徐俊青・古武・伊藤陽介（2013）小学校における情報に関する教科書の日中比較と分析．鳴門教育大学情報教育ジャーナル，10，37-43.
- 森広浩一郎・安木良・正司和彦・西村治彦（2004）電子メール経験のポートフォリオ化による情報モラル育成のための学習支援システム開発に向けた授業実践．日本教育工学会，27：109-112.
- 森山潤・川上達大・中原久志・上之園哲也・萩嶺直孝（2012a）高校生の電子メールに対する利点・欠点認識がマナー意識の形成に及ぼす影響．兵庫教育大学学校教育研究センター紀要「学校教育学研究」，24：81-89.
- 森山潤・川上達大・中原久志・上之園哲也・萩嶺直孝（2012b）高校生の電子メールに対する意識と共感経験との関連性．兵庫教育大学研究紀要，40：139-143.